

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 9 月 28 日現在

機関番号：33704

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K12968

研究課題名（和文）英国モダニズム文学における病と日常的不調の美学と政治学

研究課題名（英文）The Aesthetics and Politics of Illness and Ailments in British Modernist Literature

研究代表者

四戸 慶介（Shinohe, Keisuke）

岐阜聖徳学園大学・外国語学部・講師

研究者番号：60848216

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、英国モダニズム文学における病と日常的不調の美学と政治学の関係を考察した。特に、自身のエッセイで文学作品における「日常的不調」の重要性を説いたヴァージニア・ウルフの作品を軸に、間テクスト的読解で彼女と同時代の作家たちによる仕事との関係も考慮しながら、病と不調がなぜ書き込まれ、どのように機能しているのかを明らかにした。ウルフのテキストに関して、英国モダニズム文学の中に見られる病と日常的不調の描写を支える、フェミニスト的美学と政治学があることを提案した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

文学作品に現れる病に焦点を当てた基本的な先行研究では、これまで大病や精神的病の社会的・文化的解釈を考慮するものであったが、本研究では、そうした病と比べ見過ごされがちな「取るに足らない」日常的不調に着目した。ヴァージニア・ウルフがこれからの文学における日常の不調の重要性を強調していた事実を踏まえ、同時代の社会や文化的背景を共有していた作家たちが作品に描く日常の不調の美学的そして政治的重要性を改めて考え直す手がかりとなるものである。

研究成果の概要（英文）： This study examines the relationship between the aesthetics and politics of illness and ailments in British modernist literature. In particular, it focused on the work of Virginia Woolf, who, in her essay, discussed the importance of illness in daily life in literary works, and intertextual readings of her work, taking into account its relationship to work by her and her contemporaries. It also sought the way illness and ailments are written and how they function. With regard to Woolf's text, it was proposed that there is a feminist aesthetic and politics underpinning the depiction of illness and ailments found in British modernist literature.

研究分野：英文学および英語圏文学関連

キーワード：病 ヴァージニア・ウルフ ジェンダー 労働 モダニズム文学

## 1. 研究開始当初の背景

これまでの英語圏における病と文学の関係の研究は、死に至る大病や精神的病、例えば結核や癌、そして精神疾患などが物語においてドラマチックな、あるいは衝撃的な脚色を加える働きがあるために、その働きを主な研究の対象としてきた。病と文学の関係を明らかにした批評として頻繁に言及されるのは Susan Sontag の *Illness as Metaphor* (1978) である。Sontag はその著書で 19 世紀と 20 世紀を代表する二つの大病—結核と癌—に焦点を当て、この病に罹患した病者の人格や性質がいかにかその病が持つネガティブな (あるいはポジティブな) 社会的文化的イメージによって形成されているのかを示した。Sontag の病表象の研究とほぼ時期を同じくして、文学作品における女性登場人物や女性作家と病の関係を、特に女性と狂気の関係に焦点を当てて批評を行った Sandra Gilbert と Susan Gubar の *The Madwoman in the Attic* (1979) は病と文学の関係をフェミニスト批評の観点から考察した古典である。70 年代後半に登場したこの二つの仕事は病と文学の関係を 80 年代から 90 年代にかけての病と文学の関係を考察する研究に大きな影響を与える。

例えば 1985 年の Jeffrey Meyers の *Disease and the Novel, 1880-1960* は、Sontag の病表象を踏襲しつつ、特定の病の表象そのものよりも病とそれに苦しむ文学作品の登場人物、特に芸術家、の変遷に焦点を当て、文学と病の関係を西洋の文学史の中で改めて整理する作業を行っている。Meyers は、ギリシャ神話に描かれる病と病に苦しむ芸術家のロマンティックな関係が、ルネッサンス期、ロマン主義時代、そして 19 世紀後半に目立って活発に描かれていると Shakespeare、Swift、Johnson、Dryden、Keats、Shelley、Byron、Dostoyevsky や Nietzsche などの名を挙げながら大きな流れをまとめている。そして 20 世紀前半になり、ロマンティックな病と芸術家の関係が近代文学のテーマである個人の自己疑念、疎外感、そしてアイデンティティ喪失といった問題と絡まりながら描かれ、Thomas Mann の *The Magic Mountain* (1924) と *Doctor Faustus* (1947) でその頂上を迎え、20 世紀後半にイギリスの小説家 A.E. Ellis の *The Rack* (1958) とロシアのノーベル文学賞受賞作家 Aleksandr Solzhenitsyn の *Cancer Ward* (1968) について拒絶されるといった概要を Meyers は提示した。

フェミニスト批評の立場から病を見た研究においては、女性と狂気をネガティブなイメージで結び付ける西洋の長い文化ゆえに、批評家たちは Gilbert と Gubar による研究以降も狂気の女性の象徴性に注目し、狂気の女性を家父長制への反逆として解釈する Hélène Cixous などの批評家が現れるようになる。また、Elaine Showalter も同様に狂気の女性像に着目するが、狂気の女性像を単純に肯定的に受け入れロマンティックに扱ってしまうのではなく、19 世紀から 20 世紀にかけての文化的資料を考察することで性・ジェンダーについてのイデオロギーが精神障害とそれに伴う治療に与えた影響を明らかにしている。このように、病と文学の関係を扱う研究は文学作品中で特権化された登場人物とセットで表れるドラマティックな脚色効果を持つ大病や性・ジェンダーのイデオロギーの影響が見えやすい精神的病に焦点を当てる傾向がある研究が発展してきた。

## 2. 研究の目的

本研究が目的とするのは、1980 年代までの病の文学研究に見られた枠組みの限界を見定めつつ、1990 年代から 2000 年代にかけて徐々に現れてきたロマンティックではない病の研究に〈日常的不調〉の考察を導入し、英国モダニズム文学における日常的な身体の不調のイメージと同時代の家父長制、帝国主義、そしてモダニズム美学との関係を再考することである。

前述の学術的背景を踏まえたとき、ある問題が浮かび上がる。それは、従来の病に関する文学研究の枠組みでは、作品の重要な場面において描かれる日常的な不調の働きやその政治性はあまり焦点をあてられることがなく、その評価がこれまで明確に行われてこなかったという点である。そこで本研究が扱うのは、死に至る病だけでなく日常的に誰もが経験する不調がモダニストたちの作品の中に表れるとき、それがなぜテキストに表れ、どのように描かれ、どのような働きをしているのか、という問題である。実際に 20 世紀のモダニスト作家たちの作品に日常的な不調が少なからず物語の重要な場面で描かれている。例えば、1925 年の小説 *Mrs Dalloway* で第一次世界大戦に出兵し戦争神経症を患った青年を描いた作家 Virginia Woolf は 1926 年の“On Being Ill” (邦題「病むことについて」) と題されたエッセイの中で、これまで愛や憎しみ等は文学の一般的なテーマとして扱われてきたが、それと同様に風邪や歯痛、熱、不眠、坐骨神経痛といった不調も作品の中心的なテーマとして扱われるべきであると述べている。自身も精神的病に悩まされる生活を送っていた Woolf は病むことについて文学的考察を行うエッセイにおいて、陽の当たらない日常生活に埋もれた不調の経験に美的価値を認め、「身体の日常のドラマ」を描く必要性がある、という主張を行っている。このように Woolf がこれからの文学における日常の不調の重要性を強調していた事実を踏まえると、Woolf を始めとして、彼女と同時代の社会や文化的背景を共有していた作家たちが作品に描く日常の不調の美学的そして政治的重要性について改めて考え直す必要がある。

### 3. 研究の方法

本研究では1900年代から1940年代の期間に英国モダニズムの文学作品の中に表される病の経験の文化的意味を探る。同期間に執筆を行い、英国モダニズム作家として、そしてフェミニスト批評の先駆者として高い評価を受けるVirginia Woolfの作品群では、1910年代の初期の作品においてプロット上重要な役割を果たす熱帯病が死に至る病として象徴的に書き込まれる。1920年代の中期の作品では第一次世界大戦後に社会問題となった戦争神経症を抱える帰還兵の青年の経験が前面に描かれながら、同時にインフルエンザに罹患していた主要登場人物の病後や更年期障害で入院している人物の存在も書き込まれている。さらにその後の作品では、作品全体の死の影が中心的テーマとして扱われながら、死に至る病ではなく高齢の労働者階級の女性が掃除をするときの膝の軋みやその痛みを苦しめ、喘ぐ声が象徴的に描かれ、1940年代の後期の作品では歯痛に苦しむ女性の経験が作品プロット上重要な役割を果たすようになる。本研究はケーススタディとしてWoolfの作品に現れる死に至る病から日常的な不調への変容を考察し、英国モダニズム文学における病の文化的表象の特徴を表すひとつの軸として捉えながら同時代の作品との共時的な関係、19世紀末の作品との通時的関係、そして英国外で生まれた作品との地政学的な関係も視野に入れた間テクスト的読解を試み、病や日常的な不調について意識的にであれ無意識的にであれ共有されている／されていない文化的意味を探る。

### 4. 研究成果

(1) 2020年度は、Virginia Woolfの*Mrs Dalloway*(1925)におけるインフルエンザ、戦争神経症、そして更年期障害といった病や不調の相互関係を、同時代に同様の病と不調を扱う複数の作品と比較しながら考察する計画であった。Katherine Anne Porterの“Pale Horse, Pale Rider”(1939)を比較作品とし、研究を行った。

この研究では上記2作品を、明確にインフルエンザの感染を描く“Pale Horse, Pale Rider”と詳細にインフルエンザを描か／けなかった*Mrs Dalloway*という位置づけで比較考察を行った。この比較を通して、改めて1918年のインフルエンザパンデミックという大きな衝撃をもたらした災禍の文化的影響を再考する流れの中で見過ごされかねない病いや不調の微妙な関係性に焦点を当てることで、Woolfの*Mrs Dalloway*におけるインフルエンザ、戦争神経症そして更年期障害といった病いや不調の描写がそれぞれどのように絡み合い、どのように距離がとられているのかを考察し、このテキスト内において病いと不調で繋がる共同空間のようなものが構築される可能性を、そして、*Mrs Dalloway*というテキストがこれ以降のWoolfの作品で表れてくる日常的、私的な不調(ailments)を持つ人々を描くに至る過渡期として位置づけられる可能性を探った。

以上の研究について、2020年10月に岐阜県岐阜大学でウェブ開催された第72回日本英文学会中部支部大会にて、研究発表を行った。

(2) 2021年度は、ヴァージニア・ウルフの執筆に表れる階級意識に焦点を当てながら、小説*To the Lighthouse*の考察、そして*A Room of One's Own*、*Three Guineas*、女性協同組合(Women's Co-operative Guild)出版*Life as We Have Known It*へのウルフの序文の関連性の考察を行った。それぞれの考察は、本研究スタート時の基軸であるウルフのエッセイ“On Being Ill”に見られる日常的な不調の美的、政治的意味との関係性を意識したものである。

*To the Lighthouse*の考察では、労働者たちの身体の不調に焦点を当て、身体の痛みを抱えながら家の掃除をする登場人物の膝のきしみや呻き声などを、周囲の自然の音との一連のまとまりとして、美的・政治的な表現として捉える試みに取り組んだ。

*A Room of One's Own*、*Three Guineas*、そして*Life as We Have Known It*への序文の考察では、ジェンダーや階級という枠組みから生じる他者との距離感の問題に対してウルフが意識的であったことを確認することで、エッセイ「病むことについて」が他者との共感可能／不可能性の境界を探るテキストとして位置付ける試みに取り組んだ。本年度の研究は当初の計画では最終年度に行うものであったが、初年度の研究で扱った作品を考察する過程で浮上した「モダニズム作品における病／不調と労働の関係」の研究を進める中でテーマの関連性が強かったため、本来の計画よりも先に扱うこととなった。それぞれ成果として、*To the Lighthouse*の考察は大東文化大学大学院英文学専攻主催の特別講義として発表、*A Room of One's Own*、*Three Guineas*、そして*Life as We Have Known It*への序文の考察は、書籍『アカデミック・ダイヴァーシティの創造』(岐阜聖徳学園大学外国語学部編)に掲載された。

(3) 2022年度は、前年度に取り組んだ研究、ウルフのエッセイ“On Being Ill”に見られる日常的な不調と、①小説*To the Lighthouse*の関係性の考察、そして②エッセイ*A Room of One's Own*、*Three Guineas*、そして*Life as We Have Known It*への序文との関係性の考察、これらを結び付けるための研究を行った。これは、*To the Lighthouse*の労働者の苦痛の身体経験と音の関係の考察が、『幕間』の中に表れる音や野外劇の<中断>という象徴的な表現と女性登場人物アイサ・オリヴァーの歯痛の感覚との関係を考えるための前段階として必要な行程だったためである。

その研究内容は、労働者階級に対するウルフの複雑な眼差しを考慮しながら *To the Lighthouse* における不調を抱えながら働く労働者の身体音／労働の音／自然の音の美的・政治的表現を、Murray Schafer によって広められた音・風景・文学の関係を扱う“literary soundscape”という研究分野（これは 2020 年にケンブリッジ大学から出版された *Sound and Literature* では“Literary Soundscapes”というタイトルの Helen Groth の論文で取り上げられている）を参考に考察していくものであった。この研究は、第 5 回韓日国際ヴァージニア・ウルフ学会（The 5th Korea-Japan International Virginia Woolf Conference）にて発表を行った。この発表を経て、ウルフ作品における不調とジェンダー化／階級化された身体性の関係を明確にしていくこと、そしてウルフ作品と音（の中断や反復）の関係を扱う研究を再び見直す、という課題が明らかになった。

（4）2023 年度は、これまでヴァージニア・ウルフの作品を中心に行ってきた英国モダニズム文学における病と不調の経験に関する研究の成果をまとめるために、改めてその研究対象の主軸となるウルフのテキスト再読を行い、ウルフの描く病や不良の経験の特徴や、テーマに関する（新型コロナウイルス感染症の蔓延の影響を受けた社会の変化も視野に入れつつ）近年の研究動向の確認を行った。この研究は、所属学会に論文投稿を行った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Keisuke Shinohe
2. 発表標題 Creak, Groan, Sound of Work, and then Half-Heard Melody, Intermittent Music: A Soundscape in To the Lighthouse
3. 学会等名 The 5th Korea-Japan International Virginia Woolf Conference 2022 Rethinking Life, Art, and Virginia Woolf (The Virginia Woolf Society of Korea) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 四戸慶介
2. 発表標題 「To the Lighthouse にみる労働者の身体の痛みと働く音」
3. 学会等名 2021 年度 大東文化大学大学院 英文学専攻 特別講義
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 四戸慶介
2. 発表標題 "Pale Horse, Pale Rider"から見る Mrs Dalloway における病いと不調の共同空間の可能性
3. 学会等名 日本英文学会中部支部 第 72 回大会（ウェブ開催）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 岐阜聖徳学園大学外国語学部(編)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 彩流社	5. 総ページ数 27
3. 書名 「病と不調の経験から他者としての女性の経験へ 病者と労働者階級へのヴァージニア・ウルフの（非）共感性」 『アカデミック・ダイバーシティの創造』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------